



「作業お疲れさまでした」引っ越し完了記念写真



い。「さかえ」と平仮名表記にしたことや、義務教育学校でありながらも、「小中」の文字があえて入れられていることで村民が安心して「村の学校」と呼べる存在になっているとも言える。「こらっせ」のように学校の通称も今後募集したい。

さて、1年後の令和8年4月にはこの義務教育学校が開校する。これは教員の配置が4月1日からスタートするためだが、増改築す

る校舎はその後、半年間は完成しない。夏休み明けの工事完了を待ち、横倉にある栄小学校の校舎に引っ越しを行い、そこから本格的に新生活が始まるという流れになる。子どもたちの話し合いだけでなく、小中の教師同士もこの間新しい授業のあり方や、子どもの見方について一つの職場の同僚として交流を深めながら力量を高められる時間にもなる。

特に中学校教師はICTを活用した授業はできていても「個別最適な学び」「自由進度学習」「異年齢学習集団での学び」や「課題解決学習」など新たな授業形態は不得意分野であり、実践経験も少ない。だからこそ、今までの授業

の概念を大きく変えるチャンスになると期待している。

今までは、住民が子どもの学びに適した環境を創ってきた部分が多いが、これからは子どもた

ちと先生方で新しい学校、新しい授業、そして新しい生活を実際創っていく時間となる。そして令和8年度後半では、新たに完成した校舎により、村民も参加しながら「栄村で行ってもらいたい授業が行なわれているかどうか」をジャッジしながら、三者(子ども・教師・村民)が共に意見を出し合いつつ、参加し創り上げていく、新たな関わり合いにも期待している。そうなれば県内はもとより国内においても住民主体の話し合いにより創った学校、子どもがすべてを決めていく学校、先生方が新たな学びについて挑戦する学校、そして三者が共に高めていく学校として高い評価を得られると期待している。

なお、当村教育委員会(栄小・中)は昨年12月に長野県教育委員会が今後3年間にわたり推進する『ウェルビーイング実践校TOCO-TON(トコトン)』の指定を受け、新たな学びの確立に向け既に挑戦し始めている。

子どもたちの多様性を認め、インクルーシブ教育を推進し、ICTを用いた最先端の授業を行いながらも、「揃えない」「一律一斉がない」「教え込まない」の授業と生活スタイルがもうそこまで迫っている…。皆さんも決して外野の傍観者ではありませんよ!

「みんなで学校を創ろう!」の過程と期待(その2)



栄村教育委員会教育長(文・写真)
下 育 郎
(山ノ内町・長野市)

前回の「東京のさかえ」72号(11月発行)では、「みんなで学校を創ろう!」の今までの歩みについて書かせていただいた。どのような学校を目指し、どのように歩んでいるのか概要についてお分かりいただけたことと思う。

さて、今回73号(5月発行予定)では、この動きが今後どのように進展していくのかという点について書かせていただきたい。

今年3月には小学校から栄中学校への引っ越しが無事終了し、4月からは栄中の校舎で小学生と中学生が一緒に生活をしている。この生活が小学校の改修工事が完了

する約1年半続くことになる。

実は、令和8年度から開校する義務教育学校にとってこの1年半の日々が大変貴重かつ重要な時間となる。通常であれば、いきなり2校が統合となり、さまざまなルール等が教師から指示されることが多い。しかし、新たな学校は多様性を認め子どもたちがさまざまなことを自ら決めていく学校を目指している。1年半の中で生活のルールや委員会活動、掃除や当番活動などについて子どもたちの話し合いが日常的に行われるメリッ

分担や決められた委員会、掃除場所、各種当番、運動会や音楽会などではなく、必要ならば自分たちでそれを決めればいいし、自分たちの生活にとって必要がないと判断すれば、思い切った切り捨てていく事も可能だ。「今まではこうだったから」とか「普通は〜」「今まで当たり前にあつたら」という言葉は教師からも子どもたちからも一切聞きたくない言葉であり、学校にとって大きな思考の転換が必要となってくる。

さて、そんな生活を始めた子どもたちだが、6月末まで校章の公募も行っている。今までの新しい斬新なデザインを期待したい。学校名は3月の議会も通り「栄村立さかえ小中学校」という校名に正式決定した。村民投票の過半数がこの校名に投票したことを考えると、義務教育学校でありながらも小中の存在は今後も示したいという思いが強かったのかもしれない